



國史肇要

神代至齊明

卷一

神代至齊明

リ 5
16
1



棚谷元善編輯

國史驢手要

明治七年
二月刊行

萬蘊堂
魁文堂
發兌



國史驢手要序

晉江

宇宙廣矣。人民衆矣。分域建國。萬數不啻。而其盛於前。衰於後者。為印度。為巴庇倫。為麥西。為波斯。為猶太。為希臘。為羅馬。其微於古。著於今者。為米利堅。為



國史驢手要 卷一

序文

魯西亞。為英佛普奧諸邦。若夫
無前後亘古今。而盛且著者。獨
有支那焉耳。然彼王者革命。篡
奪相踵。六朝五代。姑置勿論。曰
夏。曰殷。曰周。曰漢。唐。宋。明。傳世
長者。亦二三百。年。乃至七八百

年。而心。况近世金元清。從殊域
入。而有之。雖名為舊邦。其實新
造之國。與夫米魯英佛。何擇焉。
恭惟我邦上古。神聖降臨。闢國
創業。事具史籍。獨未詳其年代。
及辛酉之歲。

神武天皇即位。檀原。實當周主。閏十有五年。而在西洋紀元前。六百六十年。從是而後。列聖相承。拓境撫民。以迄今日。經世一百二十有六。歷年二千五百三十有四。盛矣哉。宇內萬國。未有

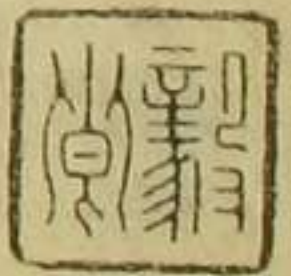
帝王傳統如此之久。且遠者也。自洋學之行。歐米諸史。逐年刊布。後進子弟。唯彼之習。叩以本邦事蹟。茫乎莫能對。老友棚谷翁。竊有慨焉。於是叅酌諸史。去冗刪繁。以著國史彙要十六卷。

國史彙要 卷一
蓋開闢以還。一治一亂。神器授受。制度沿革之跡。一目瞭然。可謂簡而盡矣。余聞近者佛國巴黎府開東洋學社。而歐米各國人在我橫濱者。亦每月相會。講究邦典。嗚呼。彼異域人。猶且講

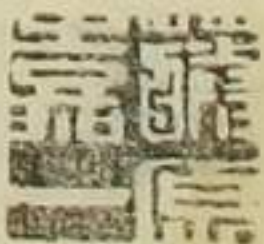
究不置。况生此間者。不知國家盛業之所由。可乎。而其求知之。必自斯編始。翁名元善。字元卿。號桂陰。長余十九歲。學富識高。尤工詞章。此雖緒餘。亦足以見其一斑云。

明治七年四月中浣

瓮江居士川田劉撰



晉齋内田嘉一書



此書乃日本國史之要略也。不啻國史之

例言

- 一 神代ノ事、短簡ノ盡ス所ニ非ス、今日本紀、古事記、古語拾遺等ニ據テ、其概略ヲ擧ク、
- 一 神武天皇以下、日本史ニ基キ、國史略、皇朝史略、通語、逸史、日本外史、政記等ヲ參取シ、節略ノ之ヲ書ス、故ニ支離割裂ヲ免レス、要其簡省ニ取ル、
- 一 位ニ即キ玉フ、詔シ玉フ、幸シ玉フト、讀ム可キヲ今其訓ヲ省ク、亦簡ニ從フナリ、此類甚ク多シ、
- 一 歷朝ノ山陵之ヲ書セス、別ニ其書アルヲ以テナリ、
- 一 公卿ノ除拜罷薨一々之ヲ畧セス、亦其畧アルヲ以テ

ナリ、關係アル者ハ書ス、武門ノ人物ニ至テモ亦然リ、皆簡ニ從フナリ、

一貧窮ヲ振恤シ、忠孝ヲ表旌スルノ典、甚タ多シ、今一々之ヲ昏セス、其大ナル者ヲ擧ク、

一中世以還ノ事、外史ニ據ル者多シ、而ノ其文ヲ變換ス、ル者アリ、敢テ改竄スルニ非ス、其簡ニノ通曉シ易キヲ欲スレハナリ、

一書法皆政記ニ遵フ、間々増損スル者アリ、近代ノ事ニ至テモ、亦其書法ヲ以テ準トナス、而ノ近世ノ事、成昏ノ微ス可キナシ、尤モ疎漏ヲ免レス、

一維新前後ノ事、小冊子ノ曲盡ス可キニ非ス、今群昏ヲ拮据ノ其大略ヲ記ス、故ニ繆誤漏脱極メテ多シ、讀ム者其レ之ヲ恕セヨ、

一此編元ト童蒙ノ需ニ應メ、一時ノ筆スル所、獨力拮据、再校ニ暇アラズ、謹テ高明ノ指摘ヲ仰ク、

桂陰小史 識

國史攬要目次

卷之一

神代
 綏靖天皇
 懿德天皇
 孝安天皇
 孝元天皇
 崇神天皇
 景行天皇
 仲哀天皇

神武天皇
 安寧天皇
 孝昭天皇
 孝靈天皇
 開化天皇
 垂仁天皇
 成務天皇
 應神天皇

仁德天皇
反正天皇
安康天皇
清寧天皇
仁賢天皇
繼體天皇
宣化天皇
敏達天皇
崇峻天皇
舒明天皇

履中天皇
允恭天皇
雄略天皇
顯宗天皇
武烈天皇
安閑天皇
欽明天皇
用明天皇
推古天皇
皇極天皇

卷之二

孝德天皇

齊明天皇

天智天皇
天武天皇
文武天皇
元正天皇
孝謙天皇
稱德天皇
桓武天皇
嵯峨天皇

和文天皇
持統天皇
元明天皇
聖武天皇
淳仁天皇
光仁天皇
平城天皇
淳和天皇

仁明天皇

清和天皇

光孝天皇

醍醐天皇

卷之三

村上天皇

圓融天皇

一條天皇

後一條天皇

後冷泉天皇

文德天皇

陽成天皇

宇多天皇

朱雀天皇

冷泉天皇

華山天皇

三條天皇

後朱雀天皇

後三條天皇

白河天皇

鳥羽天皇

近衛天皇

二條天皇

卷之四

六條天皇

安徳天皇

土御門天皇

順徳天皇

卷之五

堀河天皇

崇徳天皇

後白河天皇

高倉天皇

後鳥羽天皇

仲恭天皇

後堀河天皇

後嵯峨天皇

龜山天皇

伏見天皇

後二條天皇

卷之六

後醍醐天皇

卷之七

後村上天皇

後龜山天皇

四條天皇

後深草天皇

後宇多天皇

後伏見天皇

花園天皇

後村上天皇

長慶天皇

後小松天皇

稱光天皇

後土御門天皇

卷之八

後柏原天皇

正親町天皇

卷之九

正親町天皇

卷之十

後陽成天皇

卷之十一

後花園天皇

後奈良天皇

後陽成天皇

卷之十二

後水尾天皇

後水尾天皇

明正天皇

後光明天皇

後西天皇

卷之十三

靈元天皇

東山天皇

中御門天皇

櫻町天皇

桃園天皇

後櫻町天皇

後桃園天皇

孝格天皇

卷之十四

孝格天皇

仁孝天皇

孝明天皇

卷之十五

孝明天皇

卷之十六

今上皇帝

國史攬要卷之一

笠間

棚谷元善

編輯

○天之御中主神

天地未々成ラザルノ時、已ニ生ズ

ル所、最第一ノ神ニシテ、天ノ真中

御中ハ真中ナリニ在リ、宇宙

ノ萬物ヲ主ル造化ノ元始ナリ、

○高皇產靈神

○神皇產靈神

產靈ハ物ヲ生成スルノ靈異ナルヲ云、天地萬物皆此神ノ產靈ニ資リテ生成スル所ニシテ、凡有生ノ物、人類及

○神代

鳥獸草木ニ至ル迄、其神魂靈智性情體質悉ク皆此神ノ所賦ナリ、

○宇麻志芦芽彦遲神ヨリ以下十二神アリ之ヲ略ス

○伊弉諾神

○伊弉册神

二神天神ノ詔ヲ受ケ、天浮橋ニ立チ、天瓊戈ヲ以テ、滄海ヲ探シ、海潮其矛尖ヨリ滴下シ、自ラ凝リテ島ト為ル是、於能基呂島ナリ、自ラ凝二神、其島ニ降りテ、夫妻ト為リ、大八島國及ビ諸島諸神ヲ生シ、最後ニ天照大御神、月夜見尊、建速素戔嗚尊ヲ生ム

○天照大御神

又大日靈貴神又日神ト称ス

天照大神、光華明敷ニシテ、六合ニ照徹ス、伊弉諾神、其靈異ヲ愛シ、詔シテ高天原ヲ治メシム、又月夜見尊ヲシテ、夜ノ食國ヲ治メ、素戔嗚尊ヲシテ、滄海原ヲ治メシム、時ニ伊弉册尊ハ、根ノ國ニ在リ、素戔嗚尊、勇悍物ヲ害ヒ、日夜啼泣シ、母尊ニ根國ニ從ハンコトヲ欲ス、伊弉諾尊、其欲スル所ニ任ス、素戔嗚尊一トタビ日神ヲ見テ、後ニ國ニ就ント、乃チ天ニ升リテ、日神ト天ノ安河原ニ誓ヒ、日神ノ髻工ニ纏フ所ノ瓊ヲ啗テ、天忍穗耳尊ヲ生ム、日神曰ク、吾物ニ資テ生ム所、此吾子ナリト、鍾夢シテ之ヲ養フ、素

我鳴尊、行ヒ益無狀、屢日神ノ田ヲ害ス、然氏日神友愛シ
テ咎メス、斑駒ヲ生剥シ、齊服殿ニ投スルニ及ンデ、日神
怒ヲ發シ、天石窟ニ入り、磐戸ヲ閉テ幽居ス、於是六合闇
黒晝夜ヲ辨セス、衆妖齊ク起ル、高皇靈産神、諸神ヲ天ノ
安河原ニ會シ、常世ノ長鳴鳥ヲ集メ、天ノ金山ノ鐵ヲ取
リ、伊斯許理度賣命ヲシテ、鏡ヲ作ラシメ、櫛明玉命ヲシ
テ、八尺ノ勾玉ヲ御紡ノ玉ヲ作ラシメ、天ノ香山ノ真賢
木ヲ掘リ、上枝ニ八尺ノ勾玉ヲ懸ケ、中枝ニ八尺鏡ヲ懸
ケ、下枝ニ青白ノ和幣ヲ懸ケ、太玉命之ヲ持テ、天兒屋命
太祝詞ヲ祈シ、天宇受賣命天ノ蘿葛ヲ鬘トシ、天真拆ヲ

手織トシ、手ニ着鐸ノ才ヲ持テ、樂ヲ奏シ、燎ヲ設ケ、俳優
ヲ窟前ニ作シ、諸神歡笑甚樂シム、俳優ハ神樂天照大神、微
ク戸ヲ開テ之ヲ窺フ、手力男命即チ其石戸ヲ排シ、大神
ノ手ヲ接テ之ヲ出ス、六合復々明カナリ、諸神相議シ、素
戔鳴尊ヲ罪シテ、科スルニ千位置戸ノ被ヲ以テシ、又タ
髮鬚ヲ截テ之ヲ逐フ、尊是ヨリ天下ヲ經歷シ、新羅ノ國
ヨリ、東シテ海ヲ踰ヘ、出雲ノ國、簸ノ川上ニ至リ、足名稚
命ノ為ニ、八咫蛇ヲ斬リ、靈劍ヲ其尾中ニ獲タリ、天叢雲
劍ト云、後ニ之ヲ日神ニ獻ス、三種神寶ノ一ナリ、乃チ地
ヲ相テ、須賀ニ至テ曰、我心清々シト、因テ宮ヲ作ル、今ニ

其地ヲ須賀ト云、初宮ヲ作ル時、雲氣騰上ス、乃チ歌テ曰ク、八雲立ツ、出雲八重垣、妻隱ニ、八重垣造ル、ソノ八重垣ヲ、三十一言ノ遂ニ足名推ノ女、櫛稻田姫ヲ娶テ、八島士歌此ニ始ル奴美命ヲ生ム、其五世ノ孫ヲ、大國主神ト云、素戔嗚尊、功ヲ畢ヘテ、遂ニ根國ニ入ル、大國主神、又々大己貴命ト云、少彥名命神産巢日ト同心戮力シテ、天下ヲ經營シ、又蒼生ノ為ニ、療病ノ方、禁厭ノ法ヲ定ム、民令ニ至ルマテ、其恩頼ヲ蒙ル、

○天忍穗耳尊 高皇產靈神、天照大御神、諸神ヲ會シテ曰ク、豊葦原ノ瑞穂國ハ、吾子孫ノ可王ノ地ナリ、然ル

ニ彼國未タ平ラカス、猶邪神多シト、諸神相議シ、經津主神武御雷神ヲ遣テ、之ヲ平定セシム、二神乃チ出雲ノ國ニ降り、天神ノ命ヲ、大國主命ニ傳フ、大國主命、其子事代主神ト共ニ命ヲ奉シ、國ヲ避ケ、其杖ツク所ノ、廣茅ヲ授ケテ曰、天神ノ子、此茅ヲ以テ國ヲ治メ、ハ國必ス平安ナリ、吾將ニ退テ、幽事ヲ治メント、遂ニ杵築ノ宮ニ入ル、出雲是ナリ、於是ニ神盡ク邪神ヲ驅除、平定シテ復命ス、天忍穗耳尊、玉依比賣命ヲ娶テ、彥火瓊杵尊ヲ生ム、因テ天照大神ニ謂テ曰、吾將ニ降臨セントシテ、此子ヲ生ム、宜ク此子ヲ降スヘシ、大神之ニ從フ、

○天津彦火瓊々杵尊 天孫ト称ス、天照大御神、八咫鏡、天ノ叢雲劔、八尺瓊ノ勾玉三種ノ神宝ヲ天孫ニ授ケテ永ク天璽トナシ、天兒屋命、太玉命、天宇受賣命、伊弉許理、度賣命、玉祖命、及ヒ諸部緒ノ神等ヲ副ト為シ、乃勅シテ曰、葦原ノ瑞穂國ハ、吾子孫王タルヘキノ地也、汝宜ク就テ治ム可シ、此鏡ヲ視ルヲ吾ヲ視ルガ如ク、殿ヲ共ニシ床ヲ同ッス可シ、寶祚ノ隆ナル、天壤ト窮リ無ルヘシ、於是猿田彦命、天ノ八衢ニ奉迎シテ啓行シ、天忍日命、天久米部ヲ帥テ、前驅ト為リ、日向ノ高千穂ノ峯ニ降り、後宮殿ヲ笠狭ノ碕ニ造リテ、木花佐久夜比賣ヲ娶ル、諸部ノ

神等、天神ノ勅ニ從テ、各其職ニ供ス、多ク年所ヲ經テ崩ス、日向ノ埃ノ山陵ニ葬ル
○天彦火々出見尊
瓊々杵尊ノ子ナリ、尊山幸アリ幸ハ利ナリ、其兄火須勢理尊、海幸アリ、各其利ヲ擅ニス、兄ノ尊請テ試ニ之ヲ易フ、獲ル所ナシ、且尊ノ漁具ヲ失フヲ怒リ、督責シテ止マス、尊之ヲ患ヘ、遂ニ塩梶翁ノ教ニ從ヒ、海神ノ宮ニ到リテ、其女豊玉姬命ヲ娶リ、留ルヲ三年、乃チ失フ所ノ漁具及ヒ潮満潮涸ノ珠ヲ獲テ還ル、兄ノ尊其神異ノ徳アルニ感シ、終ニ服從ス、豊玉姬、己ニ子ヲ産ミ、海坂ヲ塞テ去ル、是

ヨリ海陸相通セスト云、尊萬千穗宮ニ在ル、五百八十
歳ニシテ崩ス高千穗ノ西、高屋ノ山上ニ葬ル

○彦波瀲武鸕草葺不合尊 彦火々出見尊ノ子ナリ

尊ノ將ニ生レントスル、産室ヲ海濱ニ造リ、葺クニ鸕羽
ヲ以テス、屋脊未タ合セス、兒已ニ生ル、豊玉姫、児ヲ波瀲
ニ置キ、還テ海郷ニ入ル、故ニ彦波瀲武鸕草葺不合尊ト
曰フ、尊亦タ海神玉依姫ヲ娶テ四子ヲ生ハ、後西州ノ宮
ニ崩ス、日向ノ吾平山上ニ葬ル

○神武天皇 神日本磐余彦尊

鸕草葺不合尊ノ第四ノ皇子ナリ、母ハ玉依姫、天皇生レ
テ明達豁如タリ、元年辛酉春正月庚辰朔、位ニ大和橿原
宮ニ即ク、先是甲寅ノ年、天皇日向ノ萬千穗ノ宮ニ在テ、
諸皇族ヲ會シテ議シテ曰ク、遼邈ノ地、未タ王澤ニ霑ハ
ズ、邑ニ君アリ、村ニ長アリ、各相凌轢シ之ヲ統一スル
無シ、吾聞ク東方ニ美地アリ、山岳四モニ周リ、以テ大業
ヲ恢弘スルニ足ル、宜ク都ヲ定テ四方ヲ經營ス可シト、
師ヲ率テ日向ヲ發シ、速吸門ニ至リ、珍彦ヲ得テ郷導ト
ナシ、安藝ニ至リテ埃宮ニ居リ、明年吉備ニ入り、高島宮

居ルヲ三歳舟楫ヲ備ヘ兵食ヲ蓄ヘ航シテ浪速ニ抵リ、
河内ヲ經テ龍田ニ赴ク、路險隘ニシテ進ミ難シ、乃チ東
シ生駒山ヨリ大和ニ入ントス、長髓彦長髓ハ皇軍ヲ孔
舍衛坂ニ邀ヘ撃ツ、皇軍利アラズ、皇兄五瀬命流矢ニ傷
ラレテ薨ス、乃チ退テ弱ヲ示シ、轉シテ紀伊ヨリ入り名
草ノ戸畔ヲ誅シ、熊野ヨリ菟田ニ至リ、其縣主兄猾ヲ誅
ス、弟猾又進テ八十梟ヲ八十ハ多國見岳ニ撃チ兄磯城
ヲ墨坂ニ撃テ之ヲ斬ル、遂ニ進テ長髓彦ヲ討ツ、道臣命
先鋒タリ、榛ヲ披テ啓行ス、饒速日命、長髓彦ヲ殺シテ以
テ降ル、於是兵ヲ分テ土蜘蛛ノ諸賊ヲ誅ス賊常ニ穴中

中州悉ク平ク、乃チ都ヲ大和ノ橿原ニ置キ、至是即
位ノ禮ヲ行フ、事代主神女三種ノ神宝ヲ正殿ニ奉シ、天
種子命、天富命、祭祀及ヒ朝政ヲ主リ、可美真手命内ノ物
部ヲ率テ宮中ヲ衛リ、道臣命久米部ヲ率テ宮門ヲ護ル、
○二年功ヲ論シ賞ヲ行フ、珍彦ヲ大和ノ國造トナシ、劔
根ヲ葛城ノ國造トナシ、弟猾ヲ猛田ノ縣主トナシ、弟磯
城ヲ磯城ノ縣主トナス、道臣命ニ田宅ヲ賜ヒ可美真手
命、天日方奇日方命ヲ申食政大夫トナス、其餘武津見命
等賜ヲ受ルヲ差アリ、○四年、靈時ヲ鳥見山ニ建テ、皇祖
天神ヲ祭ル、○三十三年、天皇巡幸シ、腋上ノ嘯間丘ニ上

リ、地形ヲ望ミ見テ曰ク、美ナル哉國々蜻蛉ノ醫占ニ似
タリト、是ヨリ始テ秋津洲ノ号アリ、○七十六年春三月
十一日天皇檀原宮ニ崩ス、壽一百二十七、畝傍山東北ノ
陵ニ葬ル、天皇神聖ノ烈ヲ兼ケ、東征ノ畧ヲ奮ヒ、一舉ニ
シテ海内ヲ定メ、祭祀ヲ謹ミ、政理ヲ察シ、有徳ヲ舉ケ有
功ヲ賞シ、三器ヲ奉安シテ、以テ萬世ノ基ヲ開ク、盛徳大
業至レル哉、

○綏靖天皇 諱神渟名川耳尊

先帝第三ノ皇子ナリ、母ハ媛踏鞬五十鈴媛皇后、天皇容
貌魁偉、沉毅ニシテ、武技ヲ善クス、姓又至孝、諒闇ニ在テ

哀慕己ノ無ク、萬機ヲ庶兄手研耳命ニ委ス、手研耳命樞
機ヲ典リ、威福ヲ擅ニシ、潜カニ大逆ヲ謀ル、帝之ヲ知リ
母兄神八井耳命ト謀テ之カ備ヲナス、山陵事畢ルニ及
テ、其困臥ヲ伺ヒ、入テ之ヲ誅ス、神八井耳命、戰懼シテ射
ルヲ能ハス、帝其弓矢ヲ奪ヒ射テ之ヲ殺ス、神八井耳命、
歎シテ曰、吾レ汝カ武ニ及ハス、吾當ニ汝ガ輔タルベシ
ト、○都ヲ葛城ニ遷ス、高丘宮ト称ス、○天皇在位三十三
年壬子ノ五月十日崩ス、壽八十四、
○安寧天皇 諱ハ磯城津彦玉手看尊
先帝ノ太子ナリ、母ハ五十鈴依媛皇后、○都ヲ大和ノ片

塩ニ遷ス浮孔宮ト称ス○天皇在位三十八年庚寅ノ十二月六日崩ス、壽五十七、

○懿徳天皇 諱ハ大日本彦耜友尊

先帝第二ノ皇子ナリ、母ノ淳名底仲媛皇后○二年都ヲ大和ノ輕ニ遷ス、曲峽宮ト称ス○三十三年周ノ孔子卒ス○天皇在位三十四年、甲子ノ九月八日崩ス、壽七十七

○孝昭天皇 諱ハ觀松彦香殖稻尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ天豊津媛皇后○都ヲ大和ノ掖上ニ遷ス、池心宮ト称ス○天皇在位八十三年、戊子ノ八月五日崩ス、壽百十四

○孝安天皇 諱ハ日本足彦國押人尊

先帝第二ノ皇子ナリ、母ハ世襲足媛皇后○都ヲ大和ノ室ニ遷ス、秋津島宮ト称ス、○天皇在位百二年、庚午ノ正月九日崩ス、壽百三十七

○孝靈天皇 諱ハ大日本根子彦太瓊尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ押媛皇后○都ヲ黒田ニ遷ス、廬戸宮ト称ス○七十二年、秦人徐福帰化ス○天皇在位七十六年、丙戌ノ二月八日崩ス、壽百二十八

○孝元天皇 諱ハ大日本根子彦國牽尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ細媛皇后○都ヲ輕ニ遷ス、境原宮

十 称ス○天皇在位五十七年、癸未ノ九月二日崩ス、壽百十七

○開化天皇

諱ハ稚日本根子彥大日々尊

先帝第二ノ皇子ナリ、母ハ鬱色謎媛皇后○都ヲ春日ニ遷ス、率川宮ト称ス、○天皇在位六十年、癸未ノ四月九日崩ス、壽百十五、史臣曰ク、安寧天皇ヨリ此ニ至ル迄、政令簡朴其民皞々如タリ、無為ノ徳不宰ノ功、人得テ名クルヲナシ、衣裳ヲ垂レテ治ル者、斯時ニ在ル乎、

○崇神天皇

諱ハ御間城入彦五十瓊殖尊

先帝第二ノ皇子ナリ、母ハ伊香色謎媛皇后○都ヲ磯城

ニ遷シ、瑞籬宮ト称ス○五年天下饑疫シ、盜起ル帝之ヲ

憂ヘ、八十萬神ヲ祭り、精ヲ勵シ治ヲ求ム、己ニシテ疫息

ニ年豊ニ民皆安シ○六年、天照大神ヲ大和ノ笠縫ニ祭

リ、神器ヲ遷奉シ、皇女豊鍬入姫ヲシテ、祀事ヲ掌ラシム、

初ノ天祖ノ勅ニ従ヒ、歷世之ヲ殿内ニ奉ス、是ニ至テ神

ヲ瀆ントヲ畏レテ之ヲ遷シ、別ニ劔鏡ヲ模造シ、以テ御

坐ニ置ク○十年、大彥命ヲ北陸ニ、武甕川命ヲ東海ニ、吉

備津命ヲ西海ニ、道主命ヲ丹波ニ遣ハシ、令ニ従ハザル

者ハ、之ヲ征誅ス、皆印綬ヲ授久之ヲ四道將軍ト謂フ、將

軍ヲ置ク此ニ始ル、會々武埴安彦反シ、其妻吾田媛ト京

ヲ罷ハント欲ス、即チ大彥命等ニ命シ、討テ之ヲ平ラク
十月、各四道ニ往キ、威徳大ニ行ハル。○十七年、多ク船舶
ヲ造リ、漕運ニ便ニス。○六十二年、河内水乏キヲ以テ、詔
シテ池溝ヲ開キ水利ヲ通ズ。○六十五年、任那國朝貢ス、外國
ノ入貢、此ニ始ル、其使者蘇那葛叱智ヲ留メテ皇太子ニ
侍セシム。○六十八年、辛卯十二月五日、天皇崩ス、壽百二
十、天皇聰明ニシテ雄畧アリ、神祇ヲ崇重シ、心ヲ民事ニ
用ヒ、百姓殷富、天下稱シテ御肇國天皇ト謂フ

○垂仁天皇

諱ハ活目入彥五十狹茅尊

先帝第三ノ皇子ナリ、母ハ御間城姫皇后、天皇側嬪ニシ

テ大度アリ、先帝之ヲ愛シ立テ、太子ト為ス。○都ヲ纏
向ニ遷シ珠城宮ト称ス。○三年、新羅ノ王子天日槍、歸化
シ、寶物ヲ献ス。○五年、狹穗彥反シ、誅ニ伏ス、狹穗彥ハ皇
后ノ兄ナリ、寵ヲ恃テ竊ニ不軌ヲ圖リ、皇后ヲ誘テ匕首
ヲ授ケ帝ヲ刺シム、一日帝、后ノ膝ヲ枕ニシテ寢ヌ、后兄
ノ言ヲ思ヒ、悲泣ニ禁ヘス、涙落テ帝ノ面ヲ沾ヌ、帝驚キ
寤テ曰、夢ニ錦色ノ小蛇、朕ガ頸ヲ繞フ、雨アリ、狹穗ヨリ
来テ朕カ面ニ注ク、如何ナル兆ソト、后恐懼流涕シテ、其
實ヲ告ク、帝ノ曰、是汝ガ罪ニ非スト、乃チ八綱田ヲシテ
之ヲ討シム、狹穗彥稻ヲ積テ城トナシ拒キ守ル、后亦タ

皇子ヲ抱テ城中ニ投ス、八綱田火ヲ城ニ縱ツ、右皇子ヲ城外ニ送リ出シ、遂ニ兄ト與ニ焚死ス、○七年、野見宿禰當麻蹶速ヲ召テカヲ痛セシム、蹶速元ヨリ勇カヲ以テ自負ス宿禰即チ蹶テ其脇骨ヲ折リ、之ヲ斃ス、遂ニ擢用セラル、相撲ノ儀此ニ始ル、○二十五年、天照大神ノ廟又伊勢ノ度會ニ遷シ、齋宮ヲ五十鈴川ノ上ニ建テ、皇女大和姫ヲシテ、豊鍬入姫ニ代テ之ヲ祀ラシム、○二十八年、皇后日葉酢姫崩ス初メ皇弟大和ヲ命薨ス、迫テ以テ殉ト為ル、帝其号泣ノ聲ヲ聞テ之ヲ惻シ、詔テ殉死ヲ禁ス、皇后崩マルニ及テ、野見宿禰土偶ヲ以テ殉ト為サ

ンヲ請フ、帝之ヲ嘉シ、定テ永制ト為ス、宿禰ニ土部ノ姓ヲ賜フ、○九十九年庚午ノ七月三日、天皇崩ス、壽百四十

○景行天皇

諱ハ大足彥忍代別尊

先帝第三ノ皇子ナリ、母ハ日葉酢媛、皇后、天皇容貌雄偉長ケ一丈二寸、○纏向ニ都シ日代宮ト称ス、○十二年筑紫ノ熊襲叛ク、天皇親征シテ周防ニ至ル、女賊神夏磯迎ヘ降り、豊前ニ入テ土蜘蛛ノ諸賊ヲ誅シ、日向ニ至リテ高屋宮ニ居ル、一臣策ヲ獻シテ、熊襲ノ二女ヲ誘シム、長女帰順シ、官軍ヲ誘テ熊襲ヲ殺サシム、帝其大逆ヲ惡テ

之ヲ誅ス、高屋宮ニ在ルヲ六年、西州悉ク平ク、帝高屋宮
ヲ發シ、筑紫ヲ巡狩シテ海ニ航ス、夜冥フシテ向フ所ヲ
知ス、火光ヲ望ミ見テ岸ニ着ク、其火ヲ尋ルニ、所ヲ知ル
ヲ莫シ、故ニ其地ヲ名テ火國ト云、○二十五年武内宿禰
ヲ遣テ、東北ノ諸國ヲ巡察ヒシム、還リ奏シテ曰、東夷ノ
中ニ、日高見ノ國アリ、日高見ハ沃地
良田アルヲ云民俗勇悍、故メテ朝
廷ノ用ト為スベシ、○三十七年、熊襲復反ク、皇子小碓尊
ニ命シテ之ヲ征ス、尊時二年十六、美濃尾張ノ射手ヲ召
テ從ハシム、尊其國ニ至テ形勢ヲ伺ヒ、女装シテ賊巢ニ
入ル、賊魁見テ之ヲ悦ビ、延テ坐側ニ置テ戯狎ス、夜闌ナ

ル井尊、劔ヲ拔テ之ヲ刺ス、賊魁呼テ曰、汝ハ誰トカ為ル、
曰我ハ是レ天皇ノ子、賊魁驚テ曰、吾未タ強勇皇子ノ如
キ者ヲ見ス、願ハクハ嘉号ヲ奉テ、ヤマト日本武ト称セント、遂
ニ死ス、熊襲悉ク平ク、是ヨリ日本武尊ト称ス、容貌雄
偉、長ケ一丈、力能ク鼎ヲ扛ク、天皇殊ニ之ヲ鍾愛ス、○四
十年、東夷叛ク、日本武ヲ遣テ之ヲ征ス、尊先ツ伊勢ニ至
テ神廟ヲ拜ス、大和姫、天叢雲劔ヲ以テ尊ニ授ク、進テ駿
河ニ至ル、賊伴ヲ降り、尊ヲシテ游獵セシメ、火ヲ繼テ之
ヲ圍ム、尊宝劔ヲ拔テ草ヲ薙キ、燧ヲ鑽テ火ヲ取ル、會々
風大ニ起リ、反テ賊徒ヲ燒ク、賊驚キ走ル、即撃テ之ヲ殲

ス、因テ宝劍ヲ草薙劍ト名ク、遂ニ相摸ヨリ上総ニ往
トス、海上風起リ、船マサニ覆ラントス、橘媛曰、海神崇ヲ
為スナリ妾之ニ當ント海ニ投ス、暴風即チ止ム、轉シテ
陸奥ニ入り蝦夷ノ境ニ至ル、賊酋風ヲ望テ降附シ、蝦夷
悉ク平ク、還テ常陸ヲ徑、甲斐ヲ越テ、碓日嶺ニ至リ、東ヲ
望シ、橘媛ヲ思フテ嘆シテ曰、吾孀者耶ト、是ヨリ山東ヲ
吾孀ト称ス、信濃ヨリ美濃ニ出テ、伊勢ニ至リテ、侍ヲ大
廟ニ献ス、能褒野ニ至リ病篤シ、吉備武彦ヲ遣テ捷ヲ京
師ニ奏シ、遂ニ能褒野ニ薨ス、時ニ齡三十、天皇大ニ悼惜
シ、葬儀天子ノ禮ニ準ス、己ニ陵ヲ造ル、忽チ白鳥アリ、飛

テ陵中ヨリ出テ、大和ノ彈琴原ニ至テ止ル、又陵ヲ斯ニ
造ル、白鳥陵ト称ス、○五十一年、武内宿禰ヲ以テ、棟梁臣
トナス、○五十三年、天皇東巡シ、東海ノ諸國ヲ歴覽シ、明
年京ニ還ル、○五十八年、近江ニ行幸シ、志賀ノ高穴穗宮
ニ在リ、六十年、庚午ノ十一月七日、高穴穗宮ニ崩ス、壽百
四十三
○成務天皇 諱ハ稚足彦尊
先帝第四ノ皇子ナリ、母ハ八坂入媛皇后、位ニ高穴穗宮
ニ即ク、遂ニ都ス、○武内宿禰ヲ以テ大臣ト為ス、武内帝
ト同日ニ生レ、幼ヨリ親シ、善シ、先帝嘗テ群臣ヲ宴ス、帝

及ビ武内至ラズ、召テ故ヲ問フ、答テ曰、百僚宴樂、宮門戒
 メズンバ有ル可カラズ、帝之ヲ嘉シ、遂ニ立テ太子ト為
 シ、武内ヲ以テ傳ト為ス、位ヲ繼グニ及テ此命アリ、大臣
 ヲ置ク、此ニ始マル、○五年、國郡ニ造長ヲ立テ、縣邑ニ
 稻置ヲ置キ、山河ヲ界シ、國縣ヲ分テ、阡陌ニ隨テ、邑里ヲ
 定メ、東西ヲ日縱ト曰ヒ、南北ヲ日横ト曰ヒ、山陽ヲ影面
 ト曰ヒ、山陰ヲ影背ト曰ス、○六十年、庚午ノ六月十一日
 崩ス、壽百八

○仲哀天皇

諱ハ足仲彥尊

景行天皇ノ皇孫日本武尊第二ノ皇子ナリ、母ハ兩道入

媛皇后○天皇容姿端正ニシテ、身長一丈、甚タ父ノ尊ニ
 似タリ、父ヲ尊ノ早世ヲ傷ミ、哀慕シテ已マズ、詔シテ白
 鳥ヲ貢セシメ、日本武尊ノ陵池ニ養フ、○元年、大伴武以
 ヲ大連ト為シ、大臣ト並ニ政ヲ輔ク、大連ヲ置ク此ニ始
 マル、○八年、先是熊襲復タ叛ク、帝舟師ヲ率テ親征シ、筑
 紫ノ香椎宮ニ在リ、群臣ヲ會シテ熊襲ヲ討ツ、議ス、
 皇后以為ラク先ヅ新羅ヲ攻ル、其ハ熊襲自ラ服セン、帝
 従ハス、進テ之ヲ討ツ、克ツシテ還ル、○九年、庚辰ノ二月
 六日、天皇香椎宮ニ崩ス、壽五十二、皇后、諸大臣ト謀リ、秘
 シテ喪ヲ發セズ、大連ニ命シ、群臣ヲ率テ宮中ヲ守ラシ

ム、竊ニ武内宿禰ヲシテ梓宮ヲ奉シ、豊浦宮ニ殯セシメ、
遂ニ策ヲ決シテ新羅ヲ征ス、鴨別カモワケヲシテ熊襲ニ當ラシ
メ、自ラ丈夫ノ装ヲ為シ、斧鉞ヲ執テ三軍ニ令シ、齊戒シ
テ神祇ニ誓フ、時ニ后身ムト有リ、石ヲ執テ腰ニ狹シ、祝
シテ曰、凱旋ノ日、茲土ニ免セント、遂ニ和珥津ワヱツヲ發シ、十
月新羅ニ至リ、戦艦海ヲ蔽フ、新羅主波沙寐ハサメ錦惶遽シテ
迎ヘ降ル、后命シテ質子ヲ納レシメ、盟約ヲ申ヌ、新羅主
誓テ每歲金帛八十船ヲ貢シ、貴臣ヲ以テ質ト為ス、高麗
百濟亦夕風ヲ望テ歸降ス、乃チ官司ヲ置テ凱旋ス、十二
月筑紫ニ至リテ皇子ヲ生ル、即チ應神天皇ナリ、

○應神天皇

諱ハ譽田別尊

仲哀天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ氣長足媛皇后、天皇生ル
、ニ及テ、腕上肉起リ、母后ノ雄裝鞆ヲ負ノ状ニ似タリ、
古語ニ靴ヲ譽田ト謂フ、故ニ名トス、○二月、皇后帝ヲ奉
シテ、豊浦宮ニ至リ、先帝ノ喪ヲ發シ、將廿ニ梓宮ヲ奉シ
テ京師ニ還ラントス、時ニ帝ノ庶兄、麿坂王、忍熊王、兵ヲ
舉テ皇師ヲ播磨ニ要ス、皇后乃チ武内ヲシテ帝ヲ奉シ
テ、海路紀伊ニ赴カシメ、自ラ舟師ヲ帥テ難波ニ向フ、時
ニ麿坂王暴ニ薨シ、忍熊王住吉ニ退キ、又退テ菟道ニ陣
ス、皇后帝ニ紀伊ニ會シ、武内ニ命シテ忍熊ヲ討シム、忍

熊敗レテ死ス、群臣皇后ヲ尊テ皇太后トナシ、朝ニ臨ン
テ政ヲ攝ス、○丁卯ノ歲百濟新羅共一入テ貢ス、太后太
子大ニ喜デ曰、是先帝ノ欲スル所ニシテ、今見ルニ及バ
ズ、群臣皆淚ヲ掩フ、○己丑ノ歲四月、皇太后崩ス、后政ヲ
攝スルヲ六十九年、壽百歲神功皇后ト謚ス、○元年春正
月、帝位ニ即久、輕島ニ都シ豐明宮ト稱ス、○七年、高麗百
濟新羅任那並ニ入貢ス、武内宿禰ヲシテ韓人ヲ役シテ
池ヲ作ラシム、韓池ト稱ス、○九年、武内宿禰ヲ遣テ西海
ヲ按察セシム、其弟甘美内宿禰、武内カ密ニ三韓ヲ招キ、
筑紫ニ據テ謀反スルヲ讒ス、勅シテ使ヲ遣リ之ヲ斬

シム、真子根ト云者、代リテ死ス、武内潜カニ關ニ詣リテ
寃ヲ訴テ、帝繼々鞠訊ス、甘美内遂ニ罪ニ伏ス、特ニ死一
等ヲ減シテ、祭ト為ス、○十四年、秦主政ノ苗裔、百濟ニ在
ル者歸化ス、諸郡ニ分チ置キ、姓ヲ秦氏ト賜フ、○十五年
百濟王、其子阿直岐ヲシテ、來朝セシメ、良馬ヲ貢ス、阿直
岐經典ニ通ス、皇子稚郎子之ヲ師トス、阿直岐更ニ其國
ノ秀才王仁ヲ薦ム、明年、王仁入朝シテ論語十卷ヲ獻ス、
是歲百濟王阿花卒ス、因テ阿直岐ヲ歸シテ、位ヲ繼シム、
○漢主劉宏ノ裔、十七縣ノ人口ヲ率テ來リ歸ス、諸國ノ
劉氏其後ナリ、○四十一年、庚午ノ二月十五日、天皇崩ス、

壽百十一、初、帝稚郎子ヲ愛シ、立テ、太子ト為ス、稚郎子、素ヨリ其兄大鷦鷯ノ賢ヲ知テ、位ヲ讓ラント欲シ、避テ菟道宮ニ往ク、大鷦鷯聽カス、互ニ相讓ル、三年民ノ貢獻スル者、適滯スル所ヲ知ラス、稚郎子遂ニ自殺ス、大鷦鷯大ニ驚キ、馳セ至リテ慟哭ス、群臣勸進シ、王仁歌ヲ作テ之ヲ諷ス、遂ニ位ニ即ク、王仁ノ歌ニ曰、難波津ニ咲クヤスノ花冬籠リ、今ハ春バト、咲クヤスノ花、

○仁徳天皇

諱ハ大鷦鷯尊

先帝第四ノ皇子ナリ、母ハ仲姫皇后、○元年、春正月、天皇即位、武内宿禰大臣タリ、故ノ如シ、難波ニ都ス、高津宮

ト称ス、○十年、皇宮ヲ修ム、天皇即位ノ初、高キニ登テ、遠望シ、人烟ノ稀少ナルヲ見テ、以為ラク、百姓窮乏ナリト、悉ク租税ヲ除キ、宮垣頽敗スレバ修メス、痛ク自ラ節儉ニス、三年ニ及ブ、凶ヒ、復タ高キニ登リ、炊烟ノ盛ンニ起ルヲ望見テ、喜テ曰、朕既ニ富メリト、皇后曰、今宮室朽壞、風雨ヲ禦カス、何ゾ富ト謂ハンヤ、帝曰、君ハ民ヲ以テ本ト為ス、民ノ富ハ朕カ富ナリ、臣民税ヲ輸シ、宮ヲ修メン、
 一ヲ請フ、聽カズ、是ニ至テ始テ課役ヲ科シテ之ヲ修ム、庶民先ヲ争テ来リ助ケ、不日ニシテ悉ク成ル、○十二年、高麗入テ貢シ、鐵盾鐵的ヲ獻ス、帝之ヲ朝ニ饗シ、大ニ群

臣ヲ會ス、戸田宿禰ヲシテ之ヲ射サシム、宿禰射テ之ヲ洞ス、使者大ニ驚テ羅拜ス、○五十三年、新羅朝貢セス、田道ヲ遣テ之ヲ討ツ、田道大ニ之ヲ破リ、四邑ノ民ヲ擒ニシテ還ル、○五十五年、蝦夷叛ク、田道ヲ遣テ之ヲ討ツ、軍敗レテ死ス、後賊抄掠シテ、其塚ヲ發ク、大蛇アリ中ヨリ出テ、虜ヲ咋テ殆ント尽ク、○六十二年、始テ氷室ヲ置ク、○七十八年、大臣武内宿禰薨ス、武内五朝ニ歷事シ柱石ノ臣タリ、年三百餘歳ト云、○八十七年、己亥ノ正月十六日崩ス、壽百十歳、天皇、聰明ニシテ寬仁、心ヲ政事ニ專ニシ、恭儉民ヲ恤ヘ、海内殷富、其末年ニ及テ二十餘年ノ間、

一人ヲ刑セズ、崩スルニ及テ、天下ノ兆民、父母ニ喪スルカ如シ、

○履中天皇 諱ハ去來穗別尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ磐之媛、皇后○帝喪ヲ除テ未タ位ニ即カズ、會々住江仲皇子、姦淫ノ事露ハレ、誅セラレンヲ恐レ、兵ヲ舉テ反シ宮ヲ燒ク、帝河内ニ逃レ、皇弟瑞齒別皇子及ヒ平群木菟ヲ遣テ之ヲ誅ス、○元年、天皇即位大和ノ磐余ニ都ス、天皇一日舟ヲ泛テ、市磯池ニ宴ス、櫻花ノ片、御蓋ニ落ツ、時方ニ冬ナリ、帝之ヲ異トス、近臣之ヲ求メ、櫻枝ヲ室山ニ得テ之ヲ獻ス、因テ推櫻宮ト稱

ス、○四年、始テ史官ヲ諸國ニ置キ、政事ノ得失ヲ記シ四方ノ志ヲ通ヒシム、○六年、乙巳ノ三月十五日、天皇崩ス、壽七十七、

○反正天皇 諱ハ瑞齒列尊

仁徳天皇第三ノ皇子、先帝ノ同母弟ナリ、○元年、正月、天皇即位、都ヲ河内ノ丹比ニ遷ス、紫籬宮ト称ス、○六年、正月二十三日、天皇崩ス、壽六十、

○允恭天皇 諱ハ雄朝津間稚子宿禰尊

仁徳天皇第四ノ皇子ナリ、○先帝崩シテ嗣ナシ、群臣迎ハ立ツ、帝遜讓シテ聽カズ、固ク請フ、遂ニ遠明日香宮ニ

シテ位ニ即ク、○帝姓氏ノ混乱スルヲ憂ヒ、内外ノ官吏ヲ會シ、盟テ詐ルルヲ無カラシム、○皇后ノ妹、衣通姫、容色絶世ニシテ才藻アリ、帝之ヲ寵シ、后ノ憚ハザルヲ以テ河内ノ茅渚宮ニ居ラシム、○四十二年、癸巳ノ正月十四日、天皇崩ス、壽八十、○帝已ニ崩ス、木梨輕太子、淫虐滋々甚ク、群臣服セス、悉ク心ヲ穴穗皇子ニ属ス、太子之ヲ知リ、兵ヲ集テ穴穗ヲ殺ント欲ス、衆ミナ従ハス、太子遂ニ自殺ス

○安康天皇 諱ハ穴穗尊

允恭天皇第二ノ皇子ナリ、母ハ忍坂大中姫皇后、○十二

月天皇即位、石上ニ遷リ、穴穗宮ト称ス、○二年、帝、同母弟
大泊瀬皇子ノ為ニ、大草香皇子ノ妹、幡梭姫ヲ聘セント
欲シ、根使主ヲシテ詔ヲ傳ヘシム、大草香大ニ喜ビ、珠纒
ヲ献シテ信ト為ス、根使主、珠纒ヲ私シテ進メ、詐テ奏
ス、大草香命ヲ拒ミ、詞意甚々倨レリト、帝怒リ、兵ヲ遣テ
之ヲ殺シ、幡梭姫ヲ取テ、大泊瀬ニ配シ、自ラ其妻中菟姫
ヲ取テ、皇后ト為ス、○三年、八月九日、帝山宮ニ幸シ、暴カ
ニ崩ス、先是大草香ノ子、眉輪王、后ニ從テ宮中ニ養ハル、
帝山宮ノ閣上ニ在テ、后ニ謂テ曰、朕汝ヲ愛スト、雖トモ
眉輪ニ介意スル耳ト、眉輪時ニ年七歲、閣下ニ戯テ之ヲ

聽キ、帝ノ醉臥ヲ伺ヒ、刺テ之ヲ弑ス、大泊瀬皇子、變ヲ聞
テ、諸兄ノ所為カト疑ヒ、兵ヲ執テ馳セ至リ、其兄八鈞、白
彦皇子ニ逼テ故ヲ問フ、答ヘス、大泊瀬皇子、刀ヲ拔テ之
ヲ斬ル、又次兄境黑彦皇子ニ問フ、亦タ答ヘス、之ヲ殺シ
ト欲ス、黑彦惧レテ眉輪ト共ニ遁レテ、大臣葛城圓ノ第
ニ匿ル、乃チ圍テ之ヲ焚ク、眉輪、黑彦皆死ス、又市邊押磐
御馬ノ二皇子ヲ殺ス、
○雄略天皇 諱ハ大泊瀬幼武尊
允恭帝第五ノ皇子、安康天皇ノ同母弟ナリ、○十一月、泊
瀬朝倉宮ニシテ位ニ即ク、○六年、諸國ニ詔シテ桑ヲ植

エシメ后妃ニ敕シテ、桑ヲ採リ蚕事ヲ勸メシム、○八年、高麗、新羅、ト兵ヲ交ウ、新羅主、援ヲ任那ノ日本府ニ乞フ、府帥兵ヲ遣テ之ヲ援シ、大ニ高麗ノ軍ヲ破ル、○九年、新羅久シク朝貢ヲ欠クヲ以テ、紀、小弓、蘇我、韓、子等ヲ遣テ之ヲ討テ、大ニ新羅ノ兵ヲ破ル、新羅主、走テ國都ヲ出ヅ、己ニシテ兵復振フ、會々紀、小弓、疾テ卒シ、將士和セズ、我軍引テ還ル、○十四年、吳人來聘シ、女工、漢織、吳織ヲ貢ス、時ニ根使主ニ命シテ、其使ヲ饗セシム、皇后、使主カ着クル所ノ珠纒ヲ見テ、泣テ曰、是先帝陛下ノ為ニ妾ヲ聘スル時、妾カ兄大草香ノ、獻シテ信ト為ス者ナリ、天皇大ニ

怒テ、之ヲ詰問ス、使臣カ罪悉ク露ハレ、誅ニ伏ス、○二十二年、豐受太神ヲ、丹波ニ奉迎シ、之ヲ伊勢ノ山田ニ祀ル、外宮ト称ス、○二十三年、己未ノ八月七日、天皇崩ス、壽六十三、帝初テ生ル、神光殿ニ滿ッ、長シテ雄豪人ニ過キ、下ヲ御スル峻刺、殺ヲ喜フ、曾テ葛城山ニ獵ス、皇后亦從フ、野豬アリ突テ至ル、舍人ヲシテ射サシム、舍人怖レテ之ヲ避ク、豬將サニ帝ニ觸レントス、帝蹴テ之ヲ殺ス、因テ舍人ヲ斬ントス、后諫テ曰、天下ミナ謂ハシ、陛下獸ヲ以テノ故ニ、人ヲ殺マスト、帝大ニ喜テ、舍人ヲ釋シ、乃チ曰、獵者ハ獸ヲ獲、朕ハ善言ヲ獲テ還ルト、衆ミナ萬歳ト呼ブ、

其諫ニ從フ亦此ノ如シ、晚年心ヲ政吏ニ留メ、國家無事ナリ、

○清寧天皇

諱ハ白髮武廣國押稚日本根子尊

先帝第三ノ皇子、母ハ葛城韓媛皇后○元年正月天皇磐余ノ甕栗宮ニシテ即位、遂ニ都ス、○二年十一月、大嘗ノ儀ヲ行フ、大嘗蓋シ此ニ始ル、○三年、臣連ヲ諸國ニ遣テ風俗ヲ巡察セシム、○初、雄略帝ハ、市邊皇子ヲ殺スヤ、日下部吾田彦、市邊子、億計王、弘計王ヲ奉シテ、難ヲ播磨ニ避ケ、二王名ヲ變シテ、忍海部細目カ家僮トナル、會、國司來目部小楯來テ其家ニ宴ム、弘計王、實ヲ告テ屈辱ヲ

免レントスス、億計王、以テ不可ト為ス、酒酣ナルニ及テ、細目二王ニ歌舞ヲ命ス、弘計王起テ舞ヒ歌ニ因テ其系ヲ述ズ、小楯大ニ驚テ再拜シ、急ニ宮ヲ造テ之ヲ奉シ、馳セテ京師ニ奏ス、帝喜テ曰、朕子無シ、今天ヨリ二兒ヲ賜フト、即迎ヘテ宮ニ入レ、億計王ヲ立テ、太子ト為ス、○四年、帝親ク囚徒ヲ録ス、○五年、甲子ノ正月十六日、天皇崩ス、壽四十二、皇太子億計王、位ヲ弘計王ニ讓ル、弘計王從ハス、互ニ相讓ル、於是太子ノ姑、飯豐皇女、簾ヲ垂テ政ヲ聽ク、十一月崩ス、太子群臣ヲ率テ、弘計皇子ヲ勸進ス、遂ニ之ニ從フ、

○顯宗天皇 諱ハ弘計之石巢別尊

履中天皇ノ皇孫ナリ、母ハ萬姫ハエヒメ○元年、正月、天皇近飛鳥イカフアヒカ八鈞宮ヤヅリノミヤニシテ、位ニ即ク、○二月、詔シテ皇考市邊皇子ノ墓ヲ求ム、一老嫗アリ之ヲ知ル、乃チ親ク近江ノ故屋野ニ幸シテ、改葬ス、○来目部小楯クメベノコタテヲ名シ、詔シテ其功ヲ褒シ、山官ヲ授ケ、姓ヲ山部連ト賜フ、○始テ曲水ノ宴ヲ設ク、○三年、四月廿五日、天皇崩ス、壽三十八、帝久シク民間ニ在リ、百姓ノ疾苦ヲ知ル、位ニ即クニ及ニテ、貧窮ヲ賑恤シ、民富ミ歲稔シ、米一斛ノ價、銀錢一文ニ直ル、

○仁賢天皇 諱ハ大石尊、億計皇子ト稱ス

履中天皇ノ皇孫ニシテ、顯宗天皇ノ同母兄ナリ、○元年、正月、天皇石上廣高宮イソノカミヒロノミヤニ於テ位ニ即ク、○二年、先是帝嘗テ先帝ト宴ス、皇太后禮ヲ帝ニ失フ者多シ、帝位ニ即クニ及テ、自ラ安ンゼス、是ニ至テ自殺ス、○初メ顯宗帝位ニ即クニ及テ、雄略帝ノ其父ヲ殺スヲ怨ミ、其陵ヲ毀タント欲ス、帝諫テ曰、我カ兄弟、富貴ヲ得ルハ、清寧帝ノ殊恩ニ頼ル、今其父雄略帝ノ陵ヲ毀ツ、是清寧帝ノ恩ニ背クナリト、顯宗帝乃チ悟ル、○十一年、八月八日、天皇崩ス、壽五十一、帝仁恕聰敏、吏其職ニ稱ヒ、民其業ヲ安ンジ、海内無事ナリ、

○武烈天皇

諱ハ小泊瀬稚鷦鷯尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ春日大娘皇后○十二月、天皇泊瀬列城宮ニ於テ位ニ即ク、遂ニ都ス、○大伴金村ヲ以テ大連トナス、初帝太子タル時、大臣平群真鳥、権ヲ四朝ニ專ラニシ、陰カニ不軌ヲ圖リ、先帝崩スルニ及テ、益々不臣ナリ、其子籙亦々太子ニ禮無シ、太子怒リ、大伴金村ト謀リ、兵ヲ發シテ籙ヲ途ニ要殺シ、遂ニ真鳥カ第ヲ圍テ、火ヲ縱テ之ヲ誅ス、○八年、丙戌ノ十二月八日、天皇崩ス、壽五十七、帝刑名ヲ好云、訟獄ヲ聽斷シ、能ク奸ヲ發シ、伏ヲ擿ス、然氏殘酷殺ヲ嗜シ、諸慘刑必ス臨ンテ之ヲ視ル、或

ハ孕婦ノ胎ヲ割キ、人ヲシテ樹ニ上ラシメ、射テ之ヲ墜シ、以テ樂ト為スニ至ル、游獵沉湎、驕奢暴斂、天下之ヲ苦

○繼體天皇

諱ハ男大迹尊

應神天皇五世ノ皇孫ナリ、母ハ振媛○元年、二月、天皇山背ノ樟葉宮ニシテ即位、帝幼ニシテ越前ノ三國ニ在リ長スルニ及テ、賢ヲ禮シ、士ヲ愛ス、先帝崩シテ嗣ナシ、大伴金村、巨勢、男、人等議シテ、法駕ヲ備ヘ、帝ヲ越前ニ迎ヘ、宮ニ入テ位ニ即ク、○百僚及ヒ庶民ニ詔シテ、カヲ農桑ニ竭カシメ、民ノ游手浮食ヲ禁ス、○五年、都ヲ山背筒城

ニ遷シ、後大和ノ磐余ニ遷シ、玉穗宮ト稱ス○七年、百濟ノ五經博士、段揚爾ヲ徵ス、至ル、○十六年、梁ノ使者、司馬達來ル、○二十一年、近江、毛野ヲシテ、兵六萬ヲ將ヒ、任那ニ赴キ、新羅ノ侵地ヲ收復セシム、筑紫國造磐井、新羅ノ賂ヲ受ケ、火豊ノ二國ニ據テ、王師ヲ拒ム、因テ大連物部麿鹿火ヲ以テ、大將ト為シ赴キ援ク、明年、麿鹿火賊ヲ擊テ大ニ之ヲ破リ、磐井ヲ斬ル、筑紫悉ク平ラキ、新羅亦服ス○二十四年、詔シテ廉節ノ士ヲ舉ク、曰、今内外虞無ク、年穀比リニ登ル、恐ラクハ吏民ノ此ニ因テ奢侈ヲ生セシム、其レ廉節ヲ舉テ、以テ政治ヲ清フセヨ、○二十五

年、天皇疾アリ、位ヲ皇太子ニ傳フ、二月七日崩ス、壽八十

二、

○安閑天皇 諱ハ勾大兄廣國押武金日尊

先帝第一ノ皇子ナリ、母ハ目子媛○元年、正月、天皇、勾金橋宮ニ於テ位ニ即ク、○二年、春、大酺ヲ賜フ、五日、○十月、二月七日、天皇崩ス、壽七十、帝德量寬大、人君ノ度アリ、在位ノ間、上下殷富ナリ、

○宣化天皇 諱ハ武小廣國押盾尊

繼體天皇、第二ノ皇子、先帝同母ノ弟ナリ、○元年、正月、天皇即位、遷テ檜隈廬入野宮ニ居ル、○菰我稻目ヲ以テ大

臣トナス、○諸國ノ屯倉ヲ修テ、凶荒ニ備ス、○二年、新羅任那ヲ侵ス、大連大伴金村ニ詔シ、其二子磐狹手彦ヲ遣テ之ヲ殺ク、磐ハ留テ筑紫ヲ鎮シ、以テ三韓ニ備ヘ、狹手彦ハ任那ノ府ニ赴ク、○四年、己未ノ二月十日、天皇崩ス、壽七十三、

○欽明天皇 諱ハ天國押開廣庭尊

先帝ノ太子ナリ、母ハ手白香媛皇后、○十二月、天皇位ニ即ク、遷テ大和磯城島ニ居ル、金刺宮ト称ス、○元年、秦漢及ヒ諸蕃ノ歸化スル者、七十餘戸ヲ檢シテ、諸國ニ編貫ス、○膳臣巴提使ヲ百濟ニ遣ル、巴提使百濟ニアリ、一タ

大ニ雪リ、其小兒ヲ失ス、平且戶外ニ虎跡アルヲ見、隨テ巖穴ニ到ル、虎アリ跳リ出テ、口ヲ張テ噬ントス、巴提使左手ニ虎舌ヲ捉リ、右手ニ刀ヲ拔テ刺シ殺シ、其皮ヲ取リ、還テ進獻ス、○十三年、百濟佛像經論ヲ獻シ、上表シテ佛ノ功德ヲ論ス、帝、群臣ヲ會シテ之ヲ議ス、大臣稻目受テ之ヲ禮ヒシトテ請フ、物部尾輿、中臣勝海、共ニ奏シテ曰、我國宗廟百神ヲ祀ル、自ラ常典アリ、別ニ蕃神ヲ禮セハ、必ス謹怒アラント、乃チ佛像ヲ稻目ニ賜フ、稻目其第ヲ捨テ、之ヲ奉ス、後ニ諸國大ニ疫ス、尾輿等奏ス、是レ仏ヲ禮スルニ由ルト、乃チ佛像ヲ難波ノ堀江ニ投シ、

悉ク伽藍ヲ焚ク、○十四年、百濟ノ醫ト曆筭等ノ博士、遮
番シテ我國ニ來ル、○二十三年、新羅兵ヲ擧テ、任那ヲ滅
シ、我官府ヲ毀ツ、紀男麻呂ヲ以テ大將ト為シ、兵ヲ率テ
新羅ヲ討テ、大ニ之ヲ破ル、已ニシテ其副將、輕進利ヲ失
ヒ、軍士紀伊企難執ヘラル、屈セスシテ死ス、又大伴狹手
彦ヲ大將トナシ、兵數萬ヲ率テ、百濟ヲ援ケ、高麗ヲ伐テ
大ニ之ヲ破リ、其都城ニ入り、珍寶ヲ獲テ還ル、○三十一
年、使ヲ新羅ニ遣リ、其任那ヲ滅スノ状ヲ詰問ス、○三十
二年、辛卯、四月十五日、天皇崩ス、壽六十三、帝疾アリ、皇
太子ニ遺詔シ、新羅ヲ征シ、任那ヲ復セシム、帝性慈仁、即

位ノ始、田ヲ墾シテ、貧民ニ給ス、後ニ定制ト為ル、又四月
中ノ巳ノ日ヲ以テ、加茂神武帝ノ廟ヲ祭ル、亦永制ト為
ル、蔡祭是ナリ、

○敏達天皇 諱ハ淳名倉太玉敷尊

先帝第二ノ皇子ナリ、母ハ石媛皇后、○元年、四月、天皇后
内ノ大井宮ニ於テ位ニ即ク、後譯語田ニ遷リ、幸玉宮ト
稱ス、○十二年、帝、任那ノ復セザルヲ憂フ、時ニ葦北ノ國
造、阿利斯登ノ子、日羅、百濟ノ將タリ、帝其智勇アルヲ聞
テ之ヲ徵シ、任那ヲ復スルノ計ヲ問フ、日羅、具サニ其策
陳ス、帝之ヲ嘉納ス、百濟ノ護送官、其國ノ陰事ヲ言フカ

ト猜ヒ、徳爾ヲシテ之ヲ殺サシム、帝大ニ怒テ徳爾ヲ誅ス、○十三年蘇我馬子、佛ヲ信シ高麗ノ僧尼ヲ師トシ、寺塔ヲ造ル、○十四年大ニ疫ス、物部守屋、中臣勝海等、馬子カ妖教ヲ信シ、此崇ヲ致ス、トヲ劾奏シ、寺塔ヲ焚キ僧尼ヲ逐ス、馬子是ニ由テ深ク守屋等ヲ怨ム、後疾アリ又仏ヲ禱ン、トヲ請ス、帝聰明佛ヲ信セズ、馬子ニ謂テ曰、汝獨リ之ヲ為セ、他人ヲ惑ス、ト勿レ、○八月十五日、天皇崩ス、壽四十八、

○用明天皇

諱ハ橋豐日尊

欽明天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ蘇我堅塩媛皇后、○九月

天皇位ニ即ク、磐余ニ遷リ、池邊雙槻宮ト称ス、○二年、四月帝疾アリ、厩戸皇子、時二年十六、側ニ侍シテ佛經ヲ誦ス、帝因テ佛ニ禱ラン、トヲ議ス、物部守屋、中臣勝海奏シテ曰、國神ヲ捨テ、蕃神ヲ敬スルハ、不可ナリ、蘇我馬子曰、獻旨ニ背ク可カラスト、遂ニ僧ヲ延テ宮ニ入ル、皇子泣テ馬子ヲ禮シ、馬子モ亦喜テ皇子ヲ拜ス、守屋二人ヲ睨視シテ、意色殊ニ惡シ、馬子遂ニ厩戸ト守屋ヲ殺サシ、トヲ謀ル、守屋之ヲ知り、退テ大和ノ阿都ニ往キ、兵ヲ集テ自ヲ守ル、皇子先ツ迹見赤擣ヲシテ、勝海ヲ殺サシム、○四月九日、天皇崩ス、壽六十九、繼嗣未タ定メス、守屋

穴穗部皇子ヲ立シテ謀ル馬子兵ヲ遣テ之ヲ弑シ遂
守屋カ益川ノ弟ヲ攻ム守屋ノ兵善ク拒ミ屢々之ヲ
卻ク迹見赤檮守屋ヲ射テ之ヲ斃ス軍遂ニ潰エ一族皆
死ス世ニ傳フ守屋カ家多ク古典籍ヲ藏ム是時散亡ス
ト守屋カ兵捕鳥部萬奮戰シテ數十人ヲ殺シ自刎シテ
死ス夜雷雨ス其家畜ヲ所ノ白狗萬ノ頭ヲ啣シ古塚ヲ
跑シテ之ヲ埋メ其側ニ斃ル朝廷之ヲ愍ミ命シテ義狗
ヲ葬リ萬カ墓ト對セシム○八月馬子太后炊屋姫ニ奏
シテ泊瀬部ノ皇子ヲ立ツ
○崇峻天皇 諱ハ泊瀬部尊

欽明天皇第十二ノ皇子ナリ母ハ蘇我小姉君○八月位
ニ即ク大和ノ倉摘宮ニ遷ル○元年厩戸皇子始テ法興
寺ヲ造ル○四年紀男麻呂ヲ大將トナシ筑紫ニ屯シ使
ヲ新羅ニ遣ル新羅順服シ遂ニ任那ヲ復ス○五年冬蘇
我馬子帝ヲ弑ス馬子策立ノ功ヲ恃ミ外舅ノ權ニ頼リ
專横日ニ甚シ帝患シテ之ヲ誅セント欲ス厩戸皇子固
ク諫メ會ノ野豬ヲ獻スル者アリ帝之ヲ指テ曰何レ時
カ此猪ノ如ク朕カ惡ム者ノ頭ヲ斫ント宮女ノ寵ヲ失
フ者之ヲ聞テ馬子ニ告ク馬子惧レ十一月三日東漢駒
ニ命シテ帝ヲ寢殿ニ弑ス壽七十二厩戸哭シテ曰是過

去ノ報ナリ、馬子遂ニ太皇炊屋姫ヲ奉シテ帝ト為シ、厚ク漢駒ヲ賞ス、漢駒切ヲ恃テ縱恣馬子ノ女ニ通ス、馬子怒テ之ヲ樹ニ縛シ、弒逆ノ罪ヲ數メ、射テ之ヲ殺ス、厩戸曰、駒ヲ誅スト雖凡、蘇我氏ノ罪、千載逃ル可カラスト、然凡馬子ヲ遇シテ、其意ニ忤ハス、

○推古天皇 諱ハ豐御食炊屋姫尊

欽明天皇ノ中女ニシテ、用明天皇、同母ノ妹ナリ、母ハ蘇我氏、○大和ノ小墾田宮ニ遷ル、○太子厩戸ヲ以テ改テ攝セシム、○十二年始テ曆日ヲ用ヒ、冠位六品ヲ定ム、曰徳仁、禮信義智、各大小アリ、又憲法十七條ヲ定ム、太子ノ

撰フ所ナリ、○十五年、始テ使ヲ隋ニ通ス、大禮蘇我妹子ヲ使トナス、書ヲ隋主ニ贈ル、畧ニ曰、日出處ノ天子書ヲ日没處ノ天子ニ致ス、恙無キヤ、○十六年、妹子帰朝ス、隋ノ裴世清同ク來ル、此歳又學生高向玄理、南淵請安及ヒ僧旻等ヲ隋ニ遣ル、○二十八年、皇太子及ヒ蘇我馬子等勅ヲ奉シテ、天皇紀、國記及ヒ臣連伴造國造等、百八十部ヲ撰ム、○二十九年、皇太子薨ス、太子佛ヲ好ミ、寺塔ヲ起ス、佛法遂ニ大ニ興ル、謚シテ聖徳ト曰フ、○三十四年、蘇我馬子薨ス、其子蝦夷大臣タリ、○三十六年三月七日、天皇崩ス、壽七十五、蘇我蝦夷、違詔ヲ矯テ、田村皇子ヲ立ツ、

境部摩理勢不可ト為ス、蝦夷、麻理勢ヲ殺ス、

○舒明天皇 諱ハ息長足日廣額尊

敏達天皇ノ皇孫ナリ、母ハ糠手媛、初田村皇子ト称ス、○元年、正月、天皇位ニ即ク、飛鳥岡ニ遷ル、岡本宮ト称ス、○二年、大仁犬上御田耜等ヲ唐ニ遣ル、○四年、御田耜等帰朝ス、唐ノ高表仁共ニ來ル、○十二年、大ニ齊會ヲ設ケ、無量壽經ヲ宮中ニ講セシム、始テ斗升斤兩ヲ定ム、○十三年、十月九日、天皇崩ス、壽四十九、

○皇極天皇 諱ハ天豐財重日足姫尊

敏達天皇ノ曾孫ナリ、茅渟王ノ皇女、舒明帝ノ皇后タリ

○元年、正月、天皇位ニ即ク、大和ノ飛鳥、板蓋宮ニ遷ル、○夏早ス、憎ヲ集メ、經ヲ誦シテ、雨ヲ祈ル、驗無シ、帝親ク南淵河上ニ幸シ、四方ヲ拜シテ、雨ヲ祈ル、大ニ雨フル、民皆萬歳ト呼ブ、○二年、蘇我、蝦夷、父子久シク朝權ヲ執リ、借逆日ニ甚ク、蝦夷病アリ、私ニ紫冠ヲ其子入鹿ニ授ケ、大臣ノ事ヲ行ハシム、入鹿權勢父ニ過キ、密ニ帝ヲ廢シテ、舒明帝ノ皇子、古人大兄ヲ立ンコトヲ謀リ、山背王ノ威望アルヲ忌ミ、巨勢徳太古ニ命シ、兵ヲ率テ王ノ班鳩宮ヲ襲テ之ヲ殺ス、王ハ聖徳太子ノ皇子ナリ、○三年、中臣鎌足、入鹿ノ專横ヲ惡ミ、之ヲ誅セント欲シ、皇弟輕皇子ト

密ニ計ヲ議シ、又皇子中大兄ノ寵畧アルヲ知ル、會ハ皇子ト鞠ヲ法興寺ニ蹴ル、皇子ノ靴脱ス、鎌足跪テ之ヲ奉ス、皇子モ亦跪テ之ヲ受ク、因テ親近シ、其謀ヲ同フス、然レ人ノ疑ヲ恐レ、同ク經ヲ南淵氏ニ受ケ、車中ニ密議ス、皇子ヲシテ倉山田麻呂ニ婚ヲ結ハシメ、又佐伯子丸、葛城綱田ヲ引テ援ト為ス。○四年、六月、皇子中大兄、及ヒ中臣鎌足等、蘇我蝦夷父子ヲ誅ス、時ニ三韓ノ使來ル、皇子、鎌足等、約ヲ定メ、夏ヲ舉ク、期ニ及テ帝大極殿ニ御シ、入鹿側ニ侍ス、皇子衛兵ヲ戒メ、諸門ヲ閉テ、自ラ長槍ヲ執テ殿側ニ隱レ、鎌足弓矢ヲ持シテ從テ、子丸綱田ヲシテ

二劔ヲ貢櫃中ニ藏シテ進シメ、倉山田表文ヲ讀ム、詭テ尽ントス、子丸等畏レテ發セズ、倉山田汗流レ聲顛テ、入鹿怪テ之ヲ問フ、答テ曰、天威咫尺、覺ヘス、此ノ如シト、皇子機ヲ失ハシテ恐レ、入テ入鹿ノ肩ヲ斫ル、子丸進テ其脚ヲ斫ル、入鹿倒レテ、御坐ニ向ヒ呼テ曰、臣何ノ罪カアル、皇子奏シテ曰、臣等宗廟ノ為ニ、逆臣ヲ誅スト、子丸綱田、入鹿ヲ刺殺ス、乃チ席ヲ以テ屍ヲ覆ヒ、之ヲ蝦夷ニ賜フ、皇子又巨勢德太古ヲシテ、兵ヲ率テ蝦夷ヲ討シム、蝦夷、圖書珍寶ヲ焚テ自殺ス、○天皇、位ヲ皇太弟ニ傳フ、○孝徳天皇 諱ハ天萬豊日尊

先帝ノ同母弟ナリ、初輕皇子ト称ス、○大化元年六月、天皇位ニ即ク、攝津ノ長柄豐寄宮ニ遷ル、年ニ号有ル、此ニ始ル、神武帝辛酉ヨリ、今年乙巳ニ至リテ、千三百五年 ○中太兄皇子ヲ、皇太子トシ、鎌足ト同ク政ヲ輔ク、大連ヲ罷テ、左右大臣及ヒ内臣ヲ置ク、○阿部倉梯麻呂ヲ以テ、左大臣ト為シ、蘇我、倉山田石川麻呂又、右大臣ト為シ、中臣鎌足ヲ内臣ト為シ、高向玄理、釋旻ヲ博士ト為ス、○二年、正月、新令ヲ下シ、前代置ク所ノ臣、連、伴、造、國造、村首、所在ノ部曲田莊ヲ罷メ、新々ニ畿内ノ國司、郡司ヲ置キ、山河ヲ界シテ、郡ノ大中、小ヲ定メ、大領、小領、主、政、主、帳ヲ置キ、戶籍ヲ造テ、班田收

授ノ法ヲ制シ、田畝ヲ定ム、田長リ三十步、廣リ十二步ノ段ト為シ、十段ヲ町ト為シ、段ノ租、稻、二束、二把、町ノ租、稻、二十二束、一束ハ米五升ナリ 舊賦役ヲ罷テ、租庸調ノ法ヲ行フ、全義解ニ詳カナリ 又國司ニ詔シテ、先ツ己ヲ正フシテ、後一人ヲ正フス可キヲ以テス、皆太子ト鎌足ト、經緯スル所、舊弊ヲ一洗シテ、權ヲ朝廷ニ收ム、郡縣ノ治是ナリ、○三年、溝渠ヲ穿テ、難波ニ通ス、民其役ヲ苦ム、上疏シテ諫ル者アリ、即日之ヲ罷ム、○五年、改テ冠十九階ヲ制シ、八省百官ヲ置ク、○白雉元年、穴戸ノ國司、白雉ヲ獻ス、因テ詔シテ元ヲ改ム、○五年、大錦上高向玄理等ヲ以テ、遣唐使ト

為ス、○十月十日、天皇崩ス、壽五十九、皇太子、皇祖母尊ヲ奉シテ、再ヒ祚ヲ踐マシム

○齊明天皇 皇極天皇ノ重祚

元年、正月、天皇、再ヒ飛鳥ノ板蓋宮ニシテ即位、○四年、越國守、阿部比羅夫、舟師百八十艘ヲ率テ、蝦夷ヲ伐テ之ヲ降ス、又肅慎ヲ伐テ、熊皮十七張ヲ献ス、○冬、帝紀伊ノ温泉ニ幸シ、蘇我赤兄ヲ留守ト為ス、有間皇子、元ヨリ異志ヲ蓄ヘ、間ニ乘シテ、乱ヲ作サシメ、謀ル、赤兄兵ヲ遣テ之ヲ執ヘ、行在ニ送ル、即チ死ヲ賜フ、○五年、阿部比羅夫、再ヒ蝦夷ヲ伐テ、後方羊蹄ノ郡ヲ置ク、○六年、新羅、唐

ノ兵ヲ借リテ、百濟ヲ滅ス、百濟ノ佐平、鬼室、福信、使ヲ遣ハシテ救ヲ乞ヒ、且其王子豊璋ヲ迎テ、主ト為シ、請フ、之ヲ許ス、○七年、正月、帝筑紫ニ幸シ、朝倉宮ニ在リ、秋七月二十四日、行宮ニ崩ス、壽六十八、皇太子、梓官ヲ奉シテ、難波ニ還ル、○冬、阿曇以羅夫等ヲシテ、舟師百艘ヲ率テ、百濟ヲ救ヒ、別ニ秦田來津ヲシテ、兵五千ヲ以テ、王子豊璋ヲ護送セシメ、立テ、百濟王ト為ス、

